7．抗精神病薬長期服用患者の麻酔管理について

藤沢俊明，窪田正裕，北川栄二
亀倉更人，福島和昭
（北海道大学歯学部附属病院歯科麻酔科）

抗精神病薬長期服用患者に対する全身麻酔では，心電図異常や血圧低下が見られるほか，特に開腹手術例に突然死が多いとの報告があり，麻酔管理上十分な注意が必要であるといわれている。

歯科領域においては，これら患者の治療に際して，意識下での実施が困難なため，全身麻酔を行なわなければならない場合が多い。そこで我々は，当院で全身麻酔を行なった抗精神病薬長期服用患者12名を対象に，抗精神病薬と麻酔との関連を調べることを目的とし，検討を加えたので報告する。

対象は平均年齢16才で，男女比は5：1であった。12名とも精神発達遅滞患者であり，処置内容はう蝕治療であった。抗精神病薬の種類では，ハロペリドールが10名に，レボメプロマジンが4名に投与されており，投与期間は6ケ月から11年7ケ月で，平均3年1ケ月であった。12名とも，術前に，心電図，血液検査，血圧などに，異常は認められなかった。これら患者に計17回の全身麻酔を行なったが，導入方法はハロセンによる緩徐導入が13例と最も多く，麻酔維持は全例ハロセンを用いた。麻酔時間は平均75分で，全例とも，術中，術後に特記すべき合併症を認めなかった。

以上の結果に文献的考察を加え，抗精神病薬と麻酔との関連について言及する。

8．皮膚筋炎患者の麻酔経験

北川栄二，窪田正裕，亀倉更人
藤沢俊明，福島和昭
（北海道大学歯学部附属病院歯科麻酔科）

皮膚筋炎は，原病の一つで，骨格筋及び皮膚の炎症を主徴とする疾患であるが，心肺など全身に及ぶため，麻酔管理上の問題点も少なくない。即ち，呼吸筋力の低下，誤嚥性肺炎の危険性，潜在的心疾患の可能性，ステロイド投与による副腎皮質機能低下などである。

今回，私達は，顎関節部の腫瘍を有する皮膚筋炎患者の麻酔を経験した。症例は34才の女性で，本院口腔外科にて，全身麻酔下での腫瘍摘出術が予定された。既往歴では，28才の頃，両足大腿部紅斑，筋肉痛，発熱が出現し，CPK高値，筋生検などの所見より，皮膚筋炎と診断され，ステロイド等の薬物療法を2年前まで受けていた。術前所見では，皮膚，筋に異常を認めず，各種検査にも，特記すべき異常を認めなかった。麻酔前投薬は，ハイドロキシジン経口投与のみとした。硫酸アトロピン静注後，サイアミラールにて導入し，GOEで麻酔を維持した。気管内挿管に際して，まずパンクロニウムを試験的に少量投与し，異常のない事を確認した後に，再投与し挿管を施行した。抜管は，筋弛緩モニター下で十分な筋力回復，自発呼吸及び完全覚醒を確認した後に行なった。術中，術後を通じて，呼吸状態，循環動態は安定しており，特に問題なく経過した。

以上の自験例に文献的考察を加え，本症の全身麻酔管理について述べる。